
台湾人美術家による「日本」の戦争美術の再定位——陳清汾と陳敬輝の事例から

陳昱君 (関西大学)

本発表の目的は、戦時体制下における台湾人美術家の創作活動を「日本本土以外の戦争美術」として再定位し、日本中心的な戦争美術史の枠組みを拡張することである。

日本における戦争美術研究は、1970年の作戦記録画返還以降進展してきたが、いくつかの問題を抱えている。特に日本本土以外で制作された戦争関連美術作品が美術史の文脈から見落とされている点である。たとえば台湾では、当時「日本国民」とされた台湾人美術家の作品が、既存研究では周縁化され、「植民地美術」の枠組みに閉じ込められている。台湾人美術家の主体性を強調し、日本における戦争美術史を補完するために、本研究では戦時体制下の台湾美術家である陳清汾、陳敬輝を対象に、彼らの作品と日本の戦争美術政策との関係性を探る。

陳清汾(チン・セイフン、1910-1987)は台北の名門出身で、知人の紹介で有島生馬に師事し、1928年に有島一家とともにフランスに遊学し、最初サロン・ドートンヌに入選した台湾人である。1938年に恩師有島の紹介で子爵田中阿歌麿の娘田中不二子と結婚し、田中家の養子となり「田中」姓を名乗った。彼は「日本画家」として上海で日中文化協会の活動に参加しながら、二科会や台湾の公募展に何回も入選した。戦時中家業の茶商を継ぐために創作を控えたため現存作品は少ないが、パリ・台湾・中国などの風景画を得意とした。これらの風景画には、台湾人美術家としての文化的アイデンティティと個人的な記憶が込められている。

陳敬輝(チン・ケイキ、1911-1968)は幼少期に養父とともに日本へ渡り、京都で養父の親友中村忠次郎の元で暮すことになった。幼稚園時から日本の教育を受け、京都市美術工芸学校、京都市立絵画専門学校に進学し日本画を勉強した。1932年に幼馴染の中村春子と結婚し、1939年から妻の姓「中村」を名乗り画壇で活動を始めた。彼の《朱胴》、《持満》、《尾錠》などの日本画は、勤務先の台湾にある中学校の学生をモデルとし、皇民化教育の場面を取り上げ、当時の台湾では珍しい時局色が濃厚な作品である。

本発表では、この陳清汾と陳敬輝という二人の台湾人美術家の作品を通して、日本本土以外の戦争美術の存在とその多様性を明らかにする。両者に共通するのは、改名が自発的な行動であり、皇民化政策下の改姓名とは本質的に異なっていたことである。また、二人ともエリート階層にいた台湾人美術家で、他の画家のように意識的に「地方色」を出し、植民地政府に反抗しようとする態度は見られない。彼らは「日本国民」として戦争協力に関与しながらも、台湾人としての文化的背景や個人的な美術的志向を作品に反映させていた。その複雑な創作態度と美術的実践は、単なる同化でも抵抗でもなく、戦時下の植民地における表現の葛藤と可能性を示す貴重な事例であるといえよう。台湾人美術家による戦時美術の再評価は、日本中心の戦争美術史に新たな視座を提供するものである。